

長谷川啓之教授「樫山純三賞」受賞記念パーティ スピーチ

**Celebrating Professor HASEGAWA Hiroyuki's Reception
of "KASHIYAMA JUNZO PRIZE" for His Publication
of *Gendai Asia Jiten* (Encyclopedia on Modern Asia)**

上田 邦義

UEDA Kuniyoshi

Abstract: One of the ISHCC Directors, Dr. HASEGAWA Hiroyuki, Professor Emeritus of Nihon University and Representative of “*Ajia Kindaika Kenkyujo*” (The Institute of Modernization of Asia), received the Fifth “Kashiyama Junzo Prize” for his publication of *Gendai Asia Jiten* (*Encyclopedia on Modern Asia*, Bunshindo, 2009) as the general editor. This is the speech by the writer made in the celebration party held in Nihon University College of Economics on 20th December, 2010. The writer introduces his queer experiences that reading HASEGAWA’s *Encyclopedia* and other writings recently brought him invitations from various Asian countries as a lecture-performer, including Malaysia and Taiwan in 2010. He then discusses a basic philosophical difference of India from China, correlating this to Noh and Kabuki: the former respects the life after death more than this life, while the latter thinks this world is the only world. He also introduces a comment from an economics major on his latest publication *Thank You, Professor Blyth*: that the reader agreed to all ideas of the author except one, that is: “Respecting economics first is a sign of immature society.” The writer, however, citing from Shakespeare’s *King Lear*, “Live long enough, and you will know the delicate meaning of each occurrence,” suspects that all the attendants of the celebration party, mostly economists, agree with the writer: “Economics first is a sign of immature society.”

Key words: KASHIYAMA Junzo, HASEGAWA Horoyuki, Modern Asia, Taiwan, R.H. Blyth, economics

樫山純三、長谷川啓之、現代アジア、台湾、R. H. ブライズ、経済学

〔国際融合文化学会役員でアジア近代化研究所代表の長谷川啓之博士（日本大学名誉教授）が、『現代アジア事典』（長谷川啓之監修、文真堂、2009年）で、第五回樫山純三賞を受賞され、2010年12月20日、日本大学経済学部「クオリティ・タイム」において祝賀パーティが開かれた。その折の祝賀スピーチ。なお、当日の配布資料に、受賞の第一の理由は「未踏の分野によくぞ思い切って挑んでくれたという野心への評価」とあり。第二の理由に、「現代アジアを理

解するのに必要な項目を、政治、経済、社会、宗教、文化、歴史の中に求め、約 2000 項目を厳選して、これにそれぞれ平均 1000 字くらいの、簡潔にして平易な解説を努めたこと」と。「構想から 10 年を要した、監修者長谷川氏と 6 名の編者入魂の作品」。

長谷川啓之教授は、1938 年静岡県生まれ。早稲田大学大学院修士課程博士課程修了。経済学博士（早稲田大学、96）。84-86 年、ロンドン大学 LSE, Research Fellow。80-2006 年、日本大学教授（現在、名誉教授）。この間、中国・北京大学経済学院、同国際関係学院、ハワイ大学、ハワイ東西センター、ほか上海、青島、マレーシアなどの大学で客員教授を歴任。]

長谷川先生、この度のご受賞、まことにオメデトウございます。

私は、経済学ではなくて英文学を専攻した者ですが、最近、長谷川先生の御著書をよませていただくようになりましてから、マレーシアとか台湾とか、アジアの国々から講演依頼をいただくようになりました。これは実に不思議な現象ですね。

『現代アジア事典』は、政治、経済、社会、宗教、文化、歴史、とすべての分野をカバーしておりまして、私にはたいへんに有難い、また面白く、読み応えのある事典であります。

そういうわけで、先月は台湾へ行ってまいりました。開港したばかりの羽田から飛ぶこと 3 時間半、台北市内の、こちらが開港したばかりの松山空港に着きました。

台北の国立台湾大学のシェイクスピア・フォーラムと、南のほうの高雄の中山大学から、私が以前から演っている『英語能：ハムレット』をやってみせろ、というお招きをいただいたのでした。

『英語能：ハムレット』というのは、1980 年代に私が静岡の仲間たちと始めたもので、シェイクスピアの『ハムレット』を原文のまま能の謡いと演出で上演するものです。

一人だけの招待でしたから、ハムレットのせりふも、オフィーリアのせりふも、地謡も全部一人で謡って、つまり独吟で 45 分ほど、一人で謡って舞いました。

せりふは大部分シェイクスピアの英語の原文です。それに謡曲の節をつけたものです。

皆さんは、そんなことが出来るものか、と思われるかも知れませんが、できるんです。プロの能役者たちが英語で能をやりませんので、私などが仲間を募って始めたわけです。

しかし、実は、夏目漱石が、明治 44 年に、『ハムレット』は能でやったら面白かろうと『朝日新聞』で提唱していたものなのです。

台湾での公演は、幸い大好評で、それぞれ公演の翌日に、英語能のワークショップ（実技稽古）を行うことになりました。

それでその時に、能と歌舞伎の違いについての質問があつて、歌舞伎は能のこどもであるが、この世にしか関心がない。しかし能は、この世とあの世（来世）の両方に関心がある、といったふうな説明をいたしました。やや割り切りすぎかもしれませんが、それが大きな違いである

と。

そして、能と歌舞伎は、インドと中国のようなものだ、と付け加えたのです。

台湾では、すこし事情が違うようですが、とも。

というのは、もう十何年も前の研究でしたが、中国人はこの世がすべてと考えている。一方インド人は、この世よりも死後の世界の方がもっと大事だと考えている、とあったからです。

しかし、中国語への通訳は、ここのところを訳してくれなかったような気がします。台湾には日本語の分かる人が多いということで、私はこのとき日本語で話し、英語でもちょっと付け加えたのです。そうしましたら、インドから見えていた二人の女性シェイクスピア研究者が大きくうなずかれたのです。

この違いの理由は、本日お集まりの皆様はアジア研究の専門家の方々ですから、ご説明申し上げるまでもないと思います。

さて、なんでこのようなお話をさせていただいたか、と申しますと、実はかように、私という人間は、時や所をわきまえずに、思っていることを率直に話す悪い性格がありまして、台北では、中国大陸からの参加者も大勢おられましたから、問題発言だったかもしれません。

実は、それで今夜も、長谷川さんからスピーチを、と頼まれたとき、私は率直に何でも話すので、ご遠慮しましょう、といいましたら、「いえ、それが先生のいい所ですから、本音を話してください」と言われまして、それなら、とお引き受けいたしました。

というわけで、いよいよ本題に入るわけですが、簡単に申し上げます。

今年の五月に『ブライズ先生、ありがとう』という本を出版いたしました。

ブライズ先生というのは、太平洋戦争後、約 20 年間、今の天皇陛下の皇太子時代の家庭教師をなさった英国人です。

ですが、国際的には *HAIKU* という英文の本で世界中に俳句を広めた人、“R.H. Blyth” として知られ、いまは世界各国語で俳句が書かれています。

平和主義者で、良心的徴兵忌避者 (conscientious objector) でした。

学習院大学が専任でしたが、日大でも専任教授同様、学生の卒論指導もなさったようです。国際関係学部長をなさった秋山正幸先生が、文理学部でブライズ先生が指導教授であった。私は東京教育大学で、9 年間教わりました。皇太子殿下に次いで長いのではないかと自負？しています。

さて、何を申し上げたいのかといえますと、この拙著『ブライズ先生、ありがとう』について、ある経済学専攻の方から感想を聞かさせていただきました。そうしますと、ひとつを除いて全部共鳴あるいは納得したが、一箇所だけショックだった、と言われたのです。

それはなにかといえますと、「経済第一は未熟な社会」という一文でした。先生は、[科学は

人類（人間性）の敵である。やがて科学によって滅びるであろう」ともおっしゃっていたのですが。

シェイクスピアの作品に『リア王』（*King Lear*）という悲劇があります。

リア王は80歳ですが、「人間長生きすれば、人生の妙味が次第にわかってくる」というせりふがあります。

私たちは、子供のころは、大人は、40代でも50代でも60代でも、みな同じような大人に見えましたが、いざ自分が、50代、60代、70代になってみますと、80までには私はまだだいぶ間がありますが、長生きするほどに、人生の妙味が次第に分かってくるという、確かにそういう気がするわけです。

シェイクスピアの原文では確か、“Live long enough, and you will know the delicate meaning of each occurrence.” というのです。「十分長く生きてみたまえ、そうすれば、人生の1つ1つの出来事の微妙な意味が分かってくる」というわけです。

今夜のこのパーティの歴史的意義も、長生きすればわかってくる、というわけです。

さて、最後に、先ほどの「経済第一は未熟な社会」ですが、今日お集まりの皆様は、長谷川先生はじめ、経済学を専攻しておられますが、本当は、「経済第一は未熟な社会」と思っておられるのではないのでしょうか。